

## 2024年度 年間活動記録集によせて

### 2014-2025 さっぽろ天神山アートスタジオのこれまでの実績

(2026.03 更新済)

◇ AIR ディレクターによる所感 (検証評価のポイント)

遠慮することなく実験的であること。

なにかの役に立たなくてもいい。

これらのアーティストの態度をどこよりも肯定する場と機会がアーティスト・イン・レジデンスであり、アーティストの制作現場 (スタジオ) である。

- AIR とは

『AIR は関係性 (ネットワーク)』

『アーティストの制作現場は自由でなければならない』

参考①：菅野幸子・日沼禎子 共著『アーティスト・イン・レジデンス まち・人・アートをつなぐポテンシャル』

参考②：Trans Artists web サイト『About AIR』

- さっぽろ天神山アートスタジオの独自性 (特徴)

> 札幌市の公共文化芸術施設との違い ⇨ 取り組み：パブリックスペースプロジェクト

おしなべて公立の「劇場」「美術館」「アートセンター」に感じる一般市民の感覚＝「入りづらい」「自分が行って良い場所かわからない」「なにをしているかわからない」「なにをしたらいいかわからない」という恐れや先入観を持たずに、入ることのできる新しい公共の芸術文化施設。理由は、遊休施設の再稼働にあたりアート専用ハードにせず公園の中にある無料休憩所の機能が天神山アートスタジオに備わった設計がなされたためである。

ここが芸術文化施設だと意識しなくても、入った人は自分で「ここにいる理由」を創ることができた＝その場にいる権利や自由＝その人独自の居場所づくりを実現した。アートを目的とした来館より「来館する人独自の目的」があってくる人が圧倒的多数。つまり、ここにおいても誰にもなにも強制されない。

子どもの放課後のきままな遊び場 / 地域住民の毎日の散歩コースの立ち寄り先 / 図書館のように勉強や仕事をする場所 / 楽器の練習場所 / 地域の祭や公園の四季を楽しむ時の立ち寄り先 / 新聞や本を読みに行く場所 / 居眠りをしたり、ぼーっとしたり他者を観察する場所 / 目的がなくてもいられる場所 / ほかではみせない自分をみせたりする / など。

まずは、この施設が『みんなの休憩場所』であることはもっとも重要な事実である。そしてその結果は、来館する人を潜在的に選別していない、という態度で市内のほかの文化芸術施設とは決定的に異なる性質を生じさせた。

この居る人の状態（コンディション）が、アートと自然に出会う（構えない、嫌ではない）ことにつながる。

参照事例：公園としての美術館「テンプルからフォーラムへ」=金沢 21 世紀美術館

そもそもアートに関心の高い市民層には、すでにその関心を満たす場所や取り組みは札幌にある（ほかの芸術文化施設及び教育普及事業等）。一方で、私が常々描いている天神山アートスタジオの目指すべき姿とは、ただの有料貸出施設ではなく、「管理者」と「利用者」といった古臭い対立構造ではなく（必要な場面ではそのように振る舞うが）、知らぬうちに巻き込まれている匿名性のたかい人々（立ち寄る市民）と、のべ 3 千人を超える国内外のアーティスト、現場のわたしたちのそれぞれの営みが混じり合っ、誰もが主役の終わりのない群像劇、または開かれたアートプロジェクトにほかならない。このディレクションに基づくありようは、ほかの既存施設との決定的な性質の違いであり、それは一体どういうものなのか、雰囲気や想像してもらえるかもしれないし、アーティストやリサーチャーから同種の空気感を受け止めてもらっていると時折聞くことがある。

パブリックスペースプロジェクトの成果は、市内公共の芸術文化施設及び事業にありように多様性をもたらす設計によって人々に居場所を提供できたこと、これまでの文化行政ではリーチできていなかった芸術文化に縁のなかった中間層に、生活の延長上で芸術文化と触れる（出会う）機会を確実に増やしたこと。このふたつの成果を誰が、どのように評価しますか？

> 作品ではなくアーティスト（人間）がいる場所 ⇨ 取り組み：アーティスト・イン・レジデンス（AIR）

アーティストは、ここで滞在型制作活動の場と機会、そしてその時間を与えられる。ここでは、「滞在型制作活動」として、発表が未定、決定に限らず作品の制作活動 / アイデアの創出や具体的な作品制作のための多岐にわたるリサーチ活動 / 札幌市内で創造的活動の一環としての人や場所との交流のための活動 / 市内の芸術文化施設や拠点での作品発表のための活動 を含んでおり、これらそれぞれの活動はそのプロセスにおいてアーティストと札幌のあらゆる事象と札幌の人々との交流が発生する。同時に、「滞在型制作活動」とは滞在場所に一時的に暮らすこと、生活することでもあり、そのレイヤーにおいてもなんだかの形で札幌の事象、札幌の人々と交流がおこる、触れ合わないわけではない。

また、地域経済の視点で考察してみると、一時的な滞在者（いわゆる「交流人口」）が地域経済の一端を担っていることは事実である。一般的にアーティストが低収入で経済的に安定しない境遇であることを前提に、アーティストの活動支援として、可能な限り利用料金を抑えて設定した天神山アートスタジオが市内、国内外のアーティストの目に留まりその結果、施設稼働率は高く維持されているので、ユーザー（支援対象）の実態をまず把握、理解することは、考察の上では必須である。例えば、オンライン上のデータでは、飛騨地方の日帰り旅行者の平均消費は約 6,608 円と算出されている。札幌市でのその数字があれば参考に、アーティストの経済状況を憶測して天神山アートスタジオに滞在したアーティストの 1 日あたりの消費金額想定を目安は一般観光客ほど多くないことは想像できるものの、滞在者の滞在日数 x 消費金額/日を割り出すと相当な数字になるのではないか。

また、『草野球からイチローまで（2025 年現在はショウヘイ）』をモットーに、活動分野、出自、キャリ

アを問わず、創造的活動を行っている実績のある人で天神山アートスタジオでの AIR を体験したいと希望する人を広く受け入れ支援しており、ここの AIR の強い特徴のひとつになっている。

滞在型制作を行うアーティストは、施設内外で多様な活動を行っているが「事業（プログラム）」として定められた期間がなく、アーティストの都合に合わせて滞在時期と期間を決めて自由に札幌での滞在型制作活動を行うことができる。当然、それらの活動に対して天神山アートスタジオは個別にコンサルを行い、ニーズに即したコーディネートをしている。概ね個々の滞在期間の最終段階では、滞在制作活動の成果を市民に向けて報告する主旨のイベントが個別に計画され実施される。天神山アートスタジオは、2014-2024 年度までは、こうした滞在アーティストのペース（時期、期間、内容）に応じてランダムに一般市民を対象にイベントを整え開催してきた。

ここで強調したいのは、天神山アートスタジオにおける「セルフファンディングプログラム（フリーでかつ経費自己負担で自主的に参加する AIR）」で生じる一般市民向けのイベント（トーク、ワークショップ、作品展示や公演等の活動発表）は、札幌市がその事業費を支出することなく、市民に芸術文化体験を提供していることであり、「セルフファンディングプログラム」のアーティストが自己負担する経費＝札幌市に投下される芸術文化予算と置き換えて理解することができるだろう。天神山アートスタジオが「国際公募 AIR プログラム」で予算設計をする際の金額に当てはめれば、海外アーティスト 1 名が 2 ヶ月間滞在し、滞在制作活動成果発表として展覧会を実施した場合、その試算は、通訳人件費、コーディネーター人件費、広報経費を除き 1,000,000 円/人となる。年間のべ 300-400 名の滞在アーティストが経費自己負担で AIR 参加しているので、札幌市は、数千万円/年を支出することなく市民が体験可能な事業をアーティストたちによって提供してもらっている。この試算は、天神山アートスタジオの年間予算の妥当性や継続運営の検証する際に、必ず念頭においていただきたい点である。ぜひ、事業費丸抱えの芸術文化施設や主催事業との比較検証をお願いしたい。

ここの運営現場、滞在アーティストと向き合う現場では、このアーティストに依存しているという事実を、特にアーティストからみて地方自治体による創造性や才能の搾取と受け止められないよう謙虚さと緊張感を忘れてはいけない。アーティストの能力と情熱に見合うマンパワーが圧倒的に不足している現場の現実があるので、十分なことは到底できないのだが、アーティストを尊重し、最大限の配慮を忘れず、なおかつできる限り温かいコーディネートを提供することを心がけてきた、その甲斐あってかアンケート回答では天神山アートスタジオの利用（AIR 体験）に高い評価をもらえている。ほんとうにありがたいことだが、それは天神山アートスタジオに限らず、アーティストにとって『AIR という機会』がどれほど重要で、切実に求められているかを証明した事実だと受け止めている。

参考：「滞在アーティストのアンケート回答集計」

一方で、AIR が市民にもたらすものとはなんだろうか。

作品とコミュニケーションをする（向き合う、その意味を味わう）ためにはちょっとした技術が必要だが、それに比べると人とのコミュニケーションはハードルが低い（アーティストが海外作家の場合、言語の壁はあるものの、慣れている人が多い）。そして、ひとりの人間の存在は多層的で、もたらす情報量は膨大である。市民は、ここで作品ではなくアーティストと出会う（アーティストを通じて作品と出会う）、アーティストのいる景色を共有する、眺める。アーティストの多彩な行為に触れる、参加する、眺める。

またそれらは市民生活の傍らで継続的に意図的に行われているため、体験を重ねることによって市民は芸術文化活動に対し寛容さを高めていく。つまり、アーティストが常時いる AIR 拠点は、アートの鑑賞機会の提供ではなく、市民にとって自分とは異なる他者の存在、自分とは異なる表現を許すトレーニング、実践を無意識におこなっている場であり機会でもあってそのための時間である。この点は、地域における芸術文化を市民が享受する際に、言い方を変えれば地域の文化度を高める、札幌市が多文化共生社会を標榜する上でもっとも必要な状態である。

そして、AIR 拠点である天神山アートスタジオは税金で運営されている芸術文化施設であるから、必然的に市民がそれらのアーティストの支援者である。アーティストは出自に拘ることなく世界の芸術文化分野の最重要のファクターであるから、札幌市民は世界の芸術文化分野を支援していることと同意義である。また、札幌市は 180 万人都市であり、市民、約 1,525 万 7 千人(2024 年度)の観光客による活発な芸術文化分野の消費行動がある。いわば大消費地であることから、今日ではその資源の枯渇を予防しコンテンツの開発や維持をするため生産現場を守るという大都市の義務がおのずと生じる。それは、漁師が森づくりを行うような循環の取り組みである。例えば PMF と同様に、芸術文化分野のプレイヤーの育成及び積極的な支援のために一定程度の予算を置く姿勢は必然ではないだろうか。そのため、広く活動分野を限定せず AIR 拠点を通じて市内、国内外のアーティストなどを支援していることは、このはじまりが一種のはずみのような事象であれどレガシーとして引き続き維持されて当然であると考えられる。歴史的にもユニークな北海道の中心都市である札幌は、面積も大きな観光都市であることは前提として考慮されるべきで、国内他地域の AIR の必然性や意義とは慎重に区別して考察、議論する必要がある。

参考：「数字で見るさっぽろ天神山アートスタジオ 2014-2024 年度（11 年間）の実績」

天神山アートスタジオにおける AIR の成果は、のべ 3,138 人(2014.05-2025.03)のアーティストに対し、札幌での滞在型制作活動に対する的確な機会と場を提供したこと。市内において、拠点施設予算は支出しているが、芸術文化分野事業費を予算化せず事業件数を増やしていること。そして、市民を芸術文化の支援者とし、無自覚な消費地から生産する都市への変容、多文化共生社会へと向かう地域に成長するための機会と場を提供できたことである。このみつつの成果をだれが、どのように検証し、評価するのでしょうか？

#### ・さっぽろ天神山アートスタジオ成果まとめ

運営スタッフ、アーティスト、よく参加してくれる市民からの意見も取り入れて追加したい⇒図形化します

> 市民の新たな居場所づくり → 市民のへケアセンター機能が生まれた

> 市内の中でも特に近隣地域との良好な関係構築 → 南平岸エリア（豊平区）、相馬神社、澄川地区町内会

> 札幌市内、特に近隣地域でのアーティストによる経済活動発出（コロナ以降の活発化は顕著）

> 施設管理を通じた他業者（警備、清掃、他）との良好な関係構築

> 広く創造的活動を行う人（アーティスト等）の支援 → 活動分野の限定がなく、国内最大数のアーティスト支援件数 → 市内における芸術文化活動及びイベント件数の増加

> 同時期滞在アーティストが国内最大人数（滞在スタジオが13室） → 常時複数名のアーティストが滞在でき、同時期アーティストのフェローシップが醸成された → 新たなプロジェクトの出現

> リピーターアーティストの多発 → 札幌のアート界隈との堅実な接続と新たなプロジェクトの出現、札幌アートシーンの活性化

> 事業費なしでの国内外のネットワーク構築 → 国内アーティストの海外派遣

> 文化庁などからの助成金獲得（2018-2020年度） → 国内アーティストの海外派遣

> 市内、特に国内外に向けた札幌の芸術文化分野及び札幌市の文化政策のプレゼンス構築

> 市内の芸術文化事業者への間接的な経済支援 → 招聘にかかる経費が抑えられる（宿泊費）

> 市内の芸術文化事業者への間接的な質的支援 → 滞在型制作活動の取り組みがやりやすくなった

> スタッフの通年雇用 → 札幌を拠点にする創造的活動をする人（アーティスト等）の生活支援

> 他都市から札幌への移住、札幌の人との結婚件数の増加